

第9回 家活グランプリ 入選作品講評

審査委員長 北川 太一（摂南大学農学部 教授）

最優秀賞

「地域をつなぐ『家の光』の力～」JAしまね出雲女性部の挑戦

島根県JAしまね 濱村 美紀さん

島根県JAしまね 出雲地区本部 ふれあい福祉課 濱村美紀さん

JAしまね女性部では、『家の光』を「活動の教科書」と位置づけて、活動計画を作り増部目標を設定していますが、当地区においても、女性部員と支部職員とが協力して、5つのブロックごとに教育文化セミナーを開催しました。とくに、JAとして行っている「おもてなしプロジェクト」においては、JAの生活店舗やガソリンスタンドなど他部門との連携をはかった結果、『家の光』『ちゃぐりん』の増部、フレミズ部員の増加、金融・共済の契約にもつながるなど、成果があがりました。他の部署と連携し、地域単位の活動を大切にして工夫を凝らすことが、地域社会におけるJAの存在感を高めることにつながっています。

優秀賞

「きっかけは…家活！」

秋田県JAあきた白神 桂田 真智子さん

入組以来、金融・共済部門で窓口や渉外・LAなどを担当してきた自分が、人事異動で生活指導の担当に。初めての部署で戸惑いながらも、『家の光』の記事からヒントをもらいながら、さまざまな活動を企画・展開しています。健康寿命100歳プロジェクトとして実施した「ノルディックウォーキング体験会」では、『家の光』の配布はもちろん、別冊付録を利用した「脳活ライフ」を提案して好評を博したことから、企画の内容・目的とプレゼントを効果的に組み合わせて成果をあげました。新規定期購読者、助け合い組織の参加者の増加につながるとともに、家活によって職場の結束も高まりつつあります。

優秀賞

「まさに教本！困ったときの家の光」

神奈川県 J A あつぎ 露木 美里さん

半年間女性部活動が行われず、コロナ禍の影響による女性部員の減少に直面するなかで、もう一度、組織や活動を盛り上げたいと、『家の光』に掲載されていた「グラスサンドアート」を地区の女性部活動として実施。部員の負担を減らすことにも配慮しながら、自らも講師になって進めました。翌年からは、SDGs を意識した「みつろうラップ」や「てまりストラップ」づくりなどに取り組み、手芸など女性部員が持つ得意な分野も活かすことで活動が広がっていきました。家の光が届いたらすぐにチラシを作成し、クイズを実施するなどの工夫により、『家の光』への関心を高めるとともに、JA 事業の PR にも成果があがっています。

佳作

「次世代へつなげる活動を目指して！」

愛知県 J A あいち中央 野口 よしみさん

人事異動で久しぶりに担当となったブロックで、活動参加者が次世代に移行することの必要性を痛感。「対話運動をその先に繋げるアクティブメンバーシップ」の考え方を大切にしながら、食・農・健康をキーワードとした活動を展開しました。前年にサークルとして立ち上がった家活グループ「オニオンズ」では、防災を重要なテーマとして、お湯ポチャレシピを使った防災食やかっぱう着づくりを実施。講習会の都度『家の光』の推進も行ったところ、購読者の増加にも結びつきました。フレミズの森では、ペットボトルを使ったピザづくりや地元野菜を活用したキッシュづくりを行い、エコキャップの回収率の増加や、フレミズの森の LINE 登録者の増加も実現しています。

佳作

「教育文化活動を通じた組織の活性化と JAのファンづくりについて」

福岡県 JA 福岡市 山口 幸一郎さん

高齢化や世代交代などが原因でつながりが薄れる中で、教育文化活動を通じた JA 事業への参加・参画を促す仕掛けづくりを行っています。教育・学習活動として実施した「ジョワカレッジ」では、フレッシュミズを対象に、JA 理念の学習と伝統食やボランティア組織との交流もはかりながら介護予防組織活動を実施。組織活性化および部員拡大方策では、各支店において多彩なサークル活動を展開し、年に一度活動成果の発表会を実施することで交流が活発になりました。最近では、JA と取引関係にある地元の企業や事務所、病院などにも『家の光』を普及・推進し、待合室で備え付けの一冊として利用してもらうことを通して、JA の理解促進をはかっています。